

D. マキアーネル著『観光倫理』に関する批判的分析 — ツーリストサイトと観光者の考察からドゥルーズ＝ガタリ哲学へ —

原 一 樹

〈Summary〉

The aim of this paper is to analyze D. MacCannell's book, *The Ethics of Sightseeing* by using sociology, city theory, and philosophy. Mainly, tourist site, tourist, and the possible connection between MacCannell's theory and the philosophy of Deleuze&Guattari are discussed.

As to tourist site, MacCannell criticize "tourist bubble", which is defined as place where people are reduced to mere customers or consumers. But we must consider positive aspect of tourist bubble as new social infrastructure. In contemporary tourism, collective memories and narratives of certain tourist destinations are important. We consume and enjoy certain selected local memories and narratives. In this situation, it can be said that our pleasure is prefigured by tourism industries or local governments. MacCannell says that we need to have the courage to see "the unconscious" of certain landscape hidden by tourist bubble. His claim is quite vague, so we need more concrete educational program of tourism ethics.

Concerning tourist, MacCannell's theory is analysed from universality, ethicality, and creativity. One of the interesting points of MacCannell's theory of ethical tourist is the inseparability of ethicality and creativity, but it should be said that his argument remains unclear because three interrelated factors (= ethics of seeing landscapes, change of tourist, creative activity of tourist) are not clearly defined.

Combining MacCannell's theory with the philosophy of Deleuze&Guattari can be of great benefit to tourism researchers. For example, we can use the concepts of "l'espace lisse" and "l'espace strié" to analyse tourist sites, and MacCannell's theory of ethical tourist would be refined with the concept of "le devenir".

1. はじめに

2011年、代表的観光社会学者アーリの『観光の眼差し』第3版と、マキアーネルの『観光倫理』が出版された。前者はそれ以前の版に対しラーセンとの共著という新たな側面が、後者はマキアーネルが「観光者や観光研究者が、より強度を持ち創造的で倫理的な関与の仕方を観光に対し持つこと」(p. 11)を願って書いたと言うように、批判的観光研究の一環として、「観光倫理」を正面から展開する点が特徴である。本稿はこのマキアーネルの言う観光者や観光研究者の創造性と倫理性の提唱を真剣に受け止めどう継承するべきかという問題を、アーリの議論や広く諸学の言説と関連づけつつ検討する。Rickly-Boydらによれば、マキアーネルとアーリの著作は

観光研究の主要対象であるツーリストサイト (tourist site) と観光者 (tourist) の両方を包括的に議論する点で卓越している。これを踏まえ本稿では、観光の位置する社会状況、ツーリストサイト、観光者という3つの観点からマキアーネルの議論を分析し、ドゥルーズ＝ガタリ哲学（以下 D&G 哲学）との接続を試みる。

予め断っておけば、観光動機や観光メディア、建築物などに関しても多岐にわたる独創的議論を展開するマキアーネルの『観光倫理』という書物は、概念的・経験的次元で、内在的かつ批判的な継承を様々に試みるべき価値を持ち、本稿はその可能性の全てを論じ尽くそうとするものではない。D&G 哲学の研究にも携わってきた筆者が本稿で試みるのは、観光の位置する社会状況、ツーリストサイト、観光者の3つに視点を限定しつつ、マキアーネルの言説と D&G 哲学との接点を模索し、今後の課題を明瞭化することである。

一見すると、この観光社会学と哲学との接続は、議論の目的や対象を異にする言説を無根拠に併置する無鉄砲な試みにも見えるかもしれない。しかし私達は、マキアーネル（及びアーリ）が、フーコーやラカンなど狭義の「哲学」（及び精神分析学）を己の議論の核心に取り込みつつ議論構築している点を見逃すわけにはいかないだろう。即ち一般論として、観光社会学の諸問題を深く思考する際にも、哲学への参照が必要であると言える。また個別的に、D&G 哲学を参照する根拠としては、彼らの諸概念が、狭義の「哲学」という領域にのみ属するものとして提出されているわけではない点が挙げられよう。彼らは、自分達の創造する諸概念が道具として広く活用されることを期待していた。逆に言うと私達は、D&G の諸概念を、彼らが予想もしなかった場面で活用すること、また、その作業の中で諸概念の改鑄・更新作業を進めること、という義務を負っているとも言える。以上を踏まえて約言すれば、本稿が実験的に試みるのは、マキアーネルの議論の可能性を D&G 哲学によって引き伸ばすこと、翻って、マキアーネルの議論を通し D&G 哲学の諸概念を観光現象の文脈に直面させることで、その更新の方向性を準備的に探ることである。

本稿においてはまず第2節において、アーリとマキアーネルの議論を参照しつつ、観光が置かれた社会状況を確認する。次いで第3節において、マキアーネルやアーリによる、「娯楽産業・観光者を歓迎する都市行政部門・都市計画者の協働が生み出す、観光に適した都市内の場所」であるツーリストバブル批判の含意や不十分さを、現代の観光や都市のあり方を踏まえつつ分析する。更に第4節で、ツーリストバブルと並びツーリストサイトの現代的様態である記憶や物語を巡る観光の問題を、マキアーネルの要請する観光者の倫理性や創造性の実現可能性の問題と関係づけて分析する。第5節では議論の中心を観光者の問題に移し、普遍性・創造性・倫理性という観点から、マキアーネルによる観光者の倫理の問題を分析する。第6節ではツーリストサイトと観光者に関する分析を D&G 哲学により更に展開すべく、前者について平滑空間と糸里空間という着想を、後者について生成変化という着想を導入する方向性を検討する。最後に第7節において、D&G 哲学とフーコー哲学を参照しつつ、マキアーネルの議論に関する哲学的総括を行う。

2. 観光の位置する社会状況

諸論者により語られてきたように、観光現象は消費社会やポストモダンという大きな社会状況の中にある¹⁾。本稿では、アーリの「眼差しの多様化」と「観光の終焉」、マキアーネルの「演出された真正性の遍在」を取り上げよう。アーリは、「19世紀の限定された観光の眼差しから、観光の眼差しに関する言説・形式・具現化の現在の多様性への変化があった」(p. 30)とし、彼が提出した「ロマン主義的・集会的眼差し」に加え、様々な「眼差し」(スペクタクル的・環境的・人類学的等)が提出されてきたと言う(p. 20)。日本でも近年、フィルムツーリズムやアニメ聖地巡礼への注目が高まっているが、アーリも「メディアの眼差し」と「観光の眼差し」が重なる現代における、「メディア化された眼差し」の存在に注意を喚起している。凡そあらゆるものが眼差しの対象となる現代、今後も「眼差しの多様化」は進展するだろう。もう一つ、アーリの言う「観光の終焉」という視点は、S. ラッシュのモダン／ポストモダン論に依拠しており、我々の生きる時代の特徴は「脱分化」であるとされる。アーリは「観光、アート、教育、写真、スポーツ…の境界は消失しつつある」と述べ、多くの時間を人々が観光者として過ごす以上、「観光の眼差し」が一般化し、「観光そのもの」は衰退すると言う(pp. 97-98)。

他方、マキアーネルは『観光倫理』で「演出された真正性の遍在化」を主張する。彼曰く、我々は「全てが見られうるものとなりつつある時代」にあり、「ラディカルな可視性が社会生活の中心原理となりつつある」(p. 20)。彼はまた、この表舞台と舞台裏の境界の崩壊を社会全体の「パラノイア化」と表現し、「演出された真正性の体制では、我々の家も街も監獄に似て来て」おり(p. 31)、「社会は完全なパノプティコンとして形成されつつある」と言う(p. 25)。以上のアーリとマキアーネルの社会状況認識をどう評価すべきか。これについては、アーリの「眼差しの多様化」や「観光の終焉」の主張が持つ説得力に比べると、マキアーネルの議論は慎重に評価する必要があると言わざるをえない。

1990年に哲学者ドゥルーズは、フーコーがパノプティコンという形象で語った規律訓練社会から「コントロール社会」への移行を示唆していた。ドゥルーズを継承するラッツァラート曰く、物理的に閉じられた施設や空間の中で主体を規律化し権力に同調させる為のフーコーの規律訓練技術は、第二次世界大戦後のテイラー主義と福祉国家の時代に最高点に達した。それに対し今や我々は、離れた場所から「生」に作用しそれらを「整流」する為のコントロール技術が駆使される時代に生きていると言う。社会理論家バウマンも、フーコー権力論の限界を示唆し、パノプティコンが「差異、選択、多様性を攻撃する」のに対し、現在増殖しつつある、「信用に値する消費者を記録しそれ以外を排除する」データベースを「選別、分離、排除の道具」・「スーパーパノプティコン」と呼ぶ。例えばクレジットカード使用者が自発的に己の情報をデータベースに提供するように、スーパーパノプティコンの体制においては、主体は自発的に体制の維持と発展に貢献する。

これらの言説を踏まえると、マキアーネルの「完全なパノプティコン装置としての社会」とい

う時代認識が、若干旧式である点は認めざるを得ないだろう。権力論という観点からは、我々は今、観光現象の文脈でいかにコントロール技術が駆使され、観光者が「自発的に体制の維持と発展」に貢献しているかを問わねばならない。また、マキアーネルの問題提起に寄り添うならば、そのような状況で観光者や観光研究者が創造的で倫理的であるとはいかなることかを問わねばならない。

以上に加え注目すべきは、マキアーネルが精神分析学を援用しつつ観光倫理の方向性を模索する点である。彼曰く、我々は今や快楽が命令となった時代を生きており、「欲望という虚構を組織化する最も野心に満ちた集団的実験」(p. 56)である観光は、我々に様々な「構築された快楽」, 「エンジニアリングされた幻想 (fantasy)」(p. 53) を与えてくる。彼によれば、「観光者への究極的な倫理的テスト」は、「彼らが己の旅行への欲望の生産的ポテンシャルを実現できるか、それとも彼らの為に創られた装置の単なる比喩となるか」(p. 6)であって、観光者の為に設えられた幻想を「突き抜ける (pierce) こと」(p. 191) が倫理的に要請される。そして、「誰も倫理的領域からは逃れられるべきではない」(p. 6) とマキアーネルは言う。

以上、アーリとマキアーネルを参照し、観光が置かれた現代の社会状況を確認し、マキアーネルの「観光倫理」の大まかな方向性を示した。続いて次節以降、具体的なツーリストサイトに関するマキアーネルの言説を、必要に応じてアーリや諸学を参照しつつ、分析する。

3. ツーリストバブル (tourist bubble) 批判

マキアーネルは、『観光倫理』第6章で、都市の象徴戦略として、「娯楽産業・観光者を歓迎する都市行政部門・都市計画者の協働が生み出す、観光に適した都市内の場所」である「ツーリストバブル」²⁾を生み出す方向と、「他者や無意識としての都市」を目指す方向の2つを挙げ、前者を批判し後者を肯定する。曰く、ディズニーランドやショッピングモール等、「歴史の終焉」を迎えた「後期資本主義の西洋都市」にあるツーリストバブルは、「プチブルの為の監獄」である(p. 98)。精神分析の語彙を用いると、これらは「純粋な欠如」であり他者に自らを尊敬することを求める「エゴ」の構造を模倣し、「他者性の見かけ」を提供しつつも「無制限のナルシズム」を許し、「予めパッケージ化されたアイデンティティ」を志向するものだと批判される(pp. 101-102)。他方でマキアーネルは、「他者や無意識としての都市」の探究者としてベンヤミンやボードレールなど、「近代性の無意識としての都市分析」を発明した者達を挙げる。彼らは「文化的無意識」や「過去の隠された断片の貯蔵所」を探索し、倫理と想像力を体現した者とされる。彼は観光者が「所有への欲望」から「創造への欲望」に向かうこと、「消費者としての仕事」から「主観的・象徴的世界の収集者としての仕事」に向かうことを願う(pp. 105-106)。

他方、アーリもまた、『観光の眼差し』第6章で、「テーマ化 (theming)」と「モール」に触れ、公共空間の私有化・商品化・制御化の進展、オリジナル以上にリアルなものを作る技術の拡散、買い物客と観光客の眼差しの脱分化、モールが与えるものとしての「演出された環境・テーマ化

された経験・消費者向け商品」といった具体的現象を指摘する。また、この消費者共同体が、特定の行動や服装のみを許容する高度な監視により維持されている点、清潔さと新しさが顕著な空間である点などにも批判的に言及する (pp. 124-130)。この、マキアーネルとアーリのツーリストバブル批判をどう評価すべきだろうか。

橋爪紳也によれば、「ツーリズムと都市デザインに関する動向は二極化しつつ」ある。一方には「テーマパークや大型商業施設、カジノ、劇場、ミュージアム」等の都市型集客施設を充実させ、高級ホテルやコンベンション施設を設け、国際的観光都市としての基盤を充実させる動きがあり、他方には「観光客向けに地域の歴史や文化を再発見するプログラム」や「ものづくり体験のプログラム」、「まちあるき」等の、「都市型のニューツーリズムの振興により集客を図ろうとする」動きがあると言う (pp. 6-8)。このことが意味するのは、ツーリストバブルと「他者や無意識としての都市」を対立的に捉えることそのことは、現実の動きに対応していると思なして良いということである。但しそれは、我々がマキアーネルとアーリによるツーリストバブル批判を鵜呑みにし、反復していれば良いことを意味するものではない。

勿論、マキアーネルやアーリの指摘通り、ツーリストバブルの至上目的は「消費の促進」であり、その空間がスーパーパノプティコンとして機能し、観光者が「自発的に体制の維持と発展」に貢献している事実は動かない。「プチブルの為の監獄」としてツーリストバブルを批判することは可能である。但し他方で我々は、現代のショッピングモール (SM) やショッピングセンター (SC) が、もはや単なる消費空間を超えた役割を担いつつある点を理解せねばならない。南後由和は、SM や SC が「商品を売る時代」から「ライフスタイルを売る時代」を経て、今や「安心・安全・地域のきずなを売る時代」に至ったと述べ、SM・SC が「地域社会のインフラ」となり、「新しい公共空間」として機能しつつある点を指摘する (pp. 126-127)。また、「軽薄な消費者 (=資本主義)」と「まじめな市民 (=共同体主義)」という構図に限界を感じるという東浩紀は、「市場の軽薄さを前提に、それをどう公共性に結び付けていくのかを考えるべきではないのか」と問題提起し、SM の可能性として「新しいコミュニティ・開放性・普遍性」を挙げる。現代の SM・SC では、イベントの開催等を通しての地域文化の創出や振興の活動も指摘されている。「他者との協働による文化創造」という形で、観光者の創造性が発揮されるのではないかという視点を持ち、SM・SC の可能性を考察する必要がある。

詰まる所、ツーリストバブルという空間は両義性を持つ。これはつまり、論者によってツーリストバブルへの評価が変動することを含意する。この点を理解し、観光研究者の創造性と倫理性を考えるとすれば、我々は須藤廣が「批判科学としての観光の社会学が成立する為の条件」として掲げた、「現代の観光現象を相対化しつつ、自らの立場も相対化する二重の相対化を生き抜くこと」を想起する必要がある (p. 161)。この提言を真摯に受け止めるならば、各研究者はツーリストバブルを生み出す現代資本主義なるものへの己の立場を反省せねばならない。本稿で筆者が言えるのは、マキアーネルとアーリの言説を反復するだけでは先に進めないと言う点である。

マキアーネルとアーリは、現代の資本主義への批判的姿勢を共有するが、批判の角度は異なっている。マキアーネルはツーリストバブルの経験を、消費に没頭しナルシズムを満たすのみの経験で、他者性との出会いが無いと批判する。他方アーリは、ドバイにオープンした巨大SCなど、世界各地に誕生しつつある「悪の楽園 (evil paradises)」を、資源浪費という環境的観点と過剰消費の観点から批判する。両者の批判は必要なものではあろう。しかし十分とは言えない。即ち、それらは現象批判に留まり、資本主義の作動論理の次元での批判にはなりえていない。これに対しD. ハーヴェイの批判はより根本的である。

ハーヴェイ曰く、現代の都市の問題は「都市への権利」、即ち「我々の内心の願望により近い形で都市を作り直し、再創造する権利」の問題である (p. 26)。然るに現在、都市を作り直す自由は「私的ないし準私的な利益集団の手に落ちて」おり (p. 57)、結果、観光客誘致や資産価値の上昇を目指す都市の再開発に「排除と略奪の過程」が付随してしまっている (p. 48)。都市開発業者や観光業者がそこから独占レント³⁾を抽出しようとする「或る都市の雰囲気や魅力」は、市民の集団的産物、即ち「コモン (共同的なもの)」であるにも拘らず (p. 133)、開発により市場取引の対象となる結果、その質が変容・劣化してしまうこともあるとハーヴェイは言う。この状況では、或る都市の雰囲気や魅力等の「文化コモンズ」を領有し商品化する権利を誰が持つかが根本問題で、また、文化コモンズという集団的象徴資本を巡る闘争で、誰の記憶・美学・利益が優先されるのかが問題となる (p. 180)。但し他方でハーヴェイは、「資本家が真正性、地域性、歴史、文化、集団的記憶、伝統等の価値を商売に利用し独占レントを追求する」ことは、常に「政治的思考と行動の為の空間」を拓きもすると言い、そこに対抗運動の可能性を見る (p. 190)。

以上のハーヴェイの議論では、都市観光開発を巡る事例への言及が顕著であり、観光研究者はこの問題提起を無視できないだろう。少なくとも、「資本主義の運動の最先端を担うものとしての観光産業・観光開発」という観点は共有可能であるはずである。その上で、「研究者のポジション」が問題となる。ハーヴェイ曰く、研究者は「あなたは誰の側に立つのか、誰の共同の利益を擁護しようとするのか、いかなる手段を以て？」という問いの前に立たされると言う。「批判科学としての観光学」を目指す者は、この問いに向き合い、観光現象の存するツーリストバブルや資本主義社会の分析において、各自の責任で「二重の相対化」を生き抜かねばならない。

4. 記憶や物語を巡る観光

前節の考察で、マキアーネルによるツーリストバブル批判が一面的である点、彼及びアーリによる資本主義批判が表層的で不十分である点が明らかになった。本節では、記憶や物語を巡る観光の問題を、マキアーネルの要請する観光者の創造性と倫理性という観点と関連させつつ検討しよう。

アーリを参照すると、現在の観光における記憶や物語の重要性が看取される。彼は、「過去の

殆ど全ての場所や全てのものが保存されうるもの」となった事実（ダークツーリズムや共産主義への眼差し）、遺産や博物館産業の私有化、遺産保護と文化ナショナリズムとの関係、多様な訪問客に対する博物館の最近の取り組み等を議論している（pp. 135-154）。また、日本において活発化しているコンテンツツーリズムの現象や研究も、現代観光における物語の重要性を示す徴候であると言えるだろう。このように記憶や物語を巡る観光が重要度を増す中で改めて理解しておくべきは、マキアーネルの言う「他者や無意識としての都市」も巻き込み、ツーリストバブルは様々なところで形成されつつある、という現状である。

マキアーネルからの先の引用にあるように、「欲望という虚構を組織化する最も野心的な集団的実験」である観光は、我々に様々な「構築された快樂」や「エンジニアリングされた幻想」を与えてくる。これが顕著に見て取れるのがSM・SCなどのツーリストバブルである。しかし他方で、円堂寺司昭が「オンステージ化する日本」という標語でまとめるように、ゆるキャラ、B級グルメ、コンテンツツーリズム、アートイベントや音楽イベントなど、「ありあわせの食材で作るアイデア節約料理」のような、「街の再舞台化」が進展しつつある点にも注目する必要がある。ポストモダン文化の特徴として、シニフィアンのシニフィエからの自律性、シニフィアンの組み合わせの恣意性等などがあるが、例えば「ゆるキャラ」は土地に根付いた記号性（史跡や食べ物等）を組み合わせ新たな「幻想」を構築し実在の土地に改めて結びつける作業であると理解できるし、コンテンツツーリズムは、虚構作品という「幻想」と「実在の土地」との序列関係や境界線の曖昧化を含む記号的操作の賜物であると言えるだろう。即ち、「幻想」により為される「世界の再魔術化」（リツツァ）は、SC・SMなどの人工的消費空間のみならず、固有の記憶と物語を持つ実在の空間でも実践されつつある。付け加えればアーリは、田園地方の住民が「パッケージ化されテーマ化された環境」を作り出し、サイクリングやアドベンチャーツーリズムの形で「サービス階級」にそれらを提供していると指摘している（p. 112）。都市環境のみならず自然環境においても、ツーリストバブルが生み出されつつある。

このようにツーリストバブルが全面化しつつある中で、我々はマキアーネルの言う「幻想」を「突き抜けること」という倫理をどう考えれば良いか。

この問いに対するマキアーネルの解答は、彼が「風景（landscape）を見ることの倫理」として語るものとなるだろう。それに従えば、我々は風景を見る際に、「風景を作った無名の人々を認める」、「風景には維持管理が必要なことを知る」、「風景の構成要素が変化しやすく一時的であることを知る」、「風景と対話する」、「全風景が記憶を含むことを自覚する」といった事柄を意識する必要がある（p. 136）。これらは田園風景の議論で提出されるが、都市空間にも適用されるだろう。マキアーネル曰く、「象徴的なもの（the symbolic）」から成る風景は、世代ごとに新しい層を積み重ねていく。即ち、一つの「象徴的なもの」はそれが持つ価値とともに次の世代の「象徴的なもの」の下へと埋め込まれ、「社会的構築物としての無意識」が形成されていく。「風景とは集合的無意識である」（p. 136）と言うマキアーネルにとって、今見えている風景に安んずることなく、所与の風景を疑い、その「無意識」に達しようと努めることが「風景を見ること

の倫理」であると言えるだろう。

マキアーネルのこの主張は方向性としては明瞭である。しかし、様々な記憶や物語、記号の組み合わせにより土地の「再舞台化」を進める諸主体の欲望の錯綜や、記憶や物語に関する記述の細密化や相克の存在などを思うと、マキアーネルの「風景を見ることの倫理」は、実際にはかなり困難を孕む実践になるのも現実であるだろう。

例えばアーリ曰く、田園風景への脅迫観念は、サービス階級の持つ「自然なもの」への嗜好性を示す現象で、サービス階級は孤立と個人的観察という学ばれたパフォーマンス（ロマン主義的眼差し）によって、「見るべきもの」として選択されたものを見る。この時、自然風景は既に脱物質化した文化的イメージとなり、人間が自然をいかに所有・制御し、そこから快樂を得るかに関する事柄となる（pp. 109-112）。先進国のサービス階級に属する人間にとって、緩やかに階級システムに根拠づけられたこの「幻想」を「突き抜ける」ことは困難を伴うはずである。

或いはマキアーネル自身は、戦争や差別等の「痛ましい記憶や物語」に関する場所の構築において、「記念碑は対立する全ての集団の役割を抑圧してはならない」（p. 172）と言うが、その実現は政治的に甚だ困難であろう。また、その場所を訪問する人々が、設えられた「記憶や物語」の表象を「突き抜けて」別の「無意識」を見ることも容易ではあるまい。

また、アナリストのD. アトキンソンは日本の観光立国に向けた提言書の中で、観光地にある日本の文化財の説明文の貧相さを嘆き、その改善を主張している。政策的に至極全うな意見だと筆者は考えるが、マキアーネルの「風景を見ることの倫理」に照らせば、設えられた「記憶や物語」を無批判に受容するだけでは不十分だということにもなる。所与の風景への「懐疑の姿勢」を持ち、余白に追いやられたものやマイナーなもの、無意識へと抑圧されたものを意識化することは、現実には難しい。

この点についてマキアーネルは、「アトラクションの前で無言のままの観光者、象徴的なものが思い通りに意識を形成することを許す観光者は、アトラクションを前にして、己の欲望の生産的ポテンシャルを諦めた者だ」（p. 90）と批判しつつ、同時に共感を示しもする。なぜならば、「アトラクションを前にして別様に振る舞うこと、それに疑問を投げかけること、それを象徴的なものだと見なすこと、これらは普通ではない勇気を必要とする」（p. 90）からである。

しかし我々としては、巧みに構築された「幻想」を「突き抜ける」為には「勇気」のみでは不十分だと指摘するべきだろう。マキアーネルの肯定する倫理的観光者が体現する「懐疑の姿勢」は、観光倫理教育によって涵養されるはずのものではないか。詳論は別稿を期すが、必然的成り行きとして、「観光倫理」は「観光教育」論へと接続されねばならない。

では、観光研究者は記憶や物語を巡る観光にどう向き合えば良いだろうか。街歩き、土地の歴史文化の発掘と演出、コンテンツツーリズム等の文脈において、特に成功事例に関する経験的・実証的調査が日本でも蓄積されてきた。この調査実践は今後ますます活発になるだろうが、その際に我々が銘記しておくべきは、記憶や物語という主題が、深く人間及び人間集団のアイデンティティを巡る政治的対立や交渉と不可分であるという事実であろう。観光研究者はますます強

く、観光現象の孕むこの政治性に関して自覚的である必要がある。特定の記憶や物語を調査すること、広く人に知らしめること、それらを軸にした街づくりや観光振興に参画すること、それら全ての振る舞いが政治的に無記であることはありえない。ここでもまた、前節での資本主義批判に関する議論と同様に、「研究者のポジション」が問題となる。残念ながらマキアーネルやアーリはこの問題について、さほど明瞭な示唆を与えてはくれない⁴⁾。我々自身が取り組むべき課題であろう。

5. マキアーネルの議論の特徴の整理と吟味

以上ここまで、観光が置かれている社会状況全般とツーリストサイトの現代的様態という文脈において、マキアーネルの「観光倫理」の議論の内実と課題を考察してきた。次に本節では、彼の議論の特徴を普遍性・創造性・倫理性という観点から、筆者なりに整理し評価したい。冒頭で Rickly-Boyd らを引用して述べたように、マキアーネル（及びアーリ）の言説はツーリストサイトと観光者の両方を射程に入れている点で、卓越している。本節以降、議論の焦点は観光者へと移ることとなる。

(1) マキアーネルの普遍性志向

筆者の見るところ、マキアーネルの議論の一つ目の特徴として、普遍性への志向の強さが挙げられる。但し注意が必要なのは、普遍性という概念が二つの様相を含む点である。結論を先に言えば、マキアーネルが、形式としての普遍性を語る際にはその妥当性に同意できるが、内容としての普遍性を語ろうとする際は、慎重な吟味が必要だと筆者は考える。

形式としての普遍性に関しては、二つの場面が挙げられる。一つはマキアーネルが観光倫理を、社会的属性に依らず全ての人間に適用される言説として提出すると謳う場面である。彼は、年代・ジェンダー・民族・性的嗜好・国籍等の社会的属性により、同じ一つの観光体験がまるで別の体験として経験される事実を認めつつも、全ての観光者にとって「共通の主観的な核」(p.5) があると言う。ここでの普遍性とは、全ての観光者がツーリストバブルや「幻想」に絡め取られる傾向性、そしてそこから抜け出る可能性を持つという、経験形式を指示するものに過ぎない。この意味での普遍性の存在は認めうるだろう。

もう一つはマキアーネルが、「絶対的他者性」を議論する場面である。ダークツーリズムを扱う章で彼は、広島原爆記念公園を訪れ、日本語の詩が記された歌碑を見た経験を語る。この詩について、「深く詩的かつ哲学的であり日本語で意味を伝えるのも難しい」という理由で、通訳が翻訳するのを躊躇したという出来事から、マキアーネルは世界の中に「知りえない事物が存在する」ことを再認識したと言う。また彼は、「その記憶を我々の中に遺して死んでしまいうる他者の経験を通してのみ、我々は己の主観性や問主観性を見出す」という哲学者デリダの言葉を引用し、デリダに従えば、「痛ましい記憶の場所を訪問することで得られるものは、我々自身の人間

性である」と結論している (pp. 178-181)。この場面で登場する普遍性は、「表象不可能な他者性」という形式を指示しており、定義上それは表象できないので、我々は「それが存在する」と認めることしかできない。

以上の形式的普遍性は、それをどう継承するかは措くとして、少なくともその存在を言うことの妥当性は理解できる。他方、マキアーネルが「内容を持つ」普遍性を語る場面は、慎重に扱わねばならない。観光が「人間性 (humanity) への扉を開く」(p. 80) ことを期待するマキアーネルは、人類という普遍性や、人類的な価値を語ろうとする傾向性を持っている。

例えばマキアーネルは、「観光という出来事は、アトラクションに具現された価値や、無数の訪問者達との間に成立するコミュニオン (communion)⁵⁾ の希少な瞬間」であるとし、観光者がアトラクションの前に立つ「観光者の瞬間」に、観光が「人間性への扉」を開く機会が到来すると見なす。事例として、「ループルを歩く者はナポレオンが歩いたのと同じホールを歩く。『ゲルニカ』の前に立つ観光者はピカソと同じ所に立つ」と言われる (p. 79)。彼のこの言明は、人類史の決定的一幕や芸術の到達しえた高みと観光者達が同一化し、一つの人類共同体としての価値体験を持ちうると告げるものとも解釈できる。しかしやはり、「観光アトラクションの普遍的価値」は容易には語りえないものだろう。価値を認めない、或いは知らない者の存在や、価値あるものとして何かが提示され固定されるまでのプロセスの存在が、我々の視野に浮上するからである。

もう一つ、マキアーネルが「場所」と「稀な (uncommon) 土地としての風景」とを区別し、後者を肯定する点にも注目できる。彼によると、「安全性・馴染み深さ・親や子への責任」が存する「場所」は、人間の生産的ポテンシャルの囲い込みである。即ち、場所への人々の固執は、無垢な形としてはノスタルジー（基本的価値への回帰、自分達が誰でどこから来たかを確認する為の系譜学的調査）となり、罪深い形としてはノマド的・ディアスポラ的な他者への憎悪となると言う。これに対しマキアーネルは、「風景が完全な能力を発揮する時」に見出される「稀な土地」で、一瞬であれ人々が主体として集まる可能性を示唆し、肯定する。この主張の含意は難解だが、例えば月面の風景を見る時に我々が、人間社会があらゆる場所で生じうるものではない点や、空間的・地理的に完全に規定され尽くすことが無い点に思い至り、大いなる感情 (great emotions) を持つことになるとの言明をヒントとしたい (pp. 123-128)。これを踏まえると、「社会的属性抜きで主体同士の出会い」は、地球上の具体的場所で実現されるのではなく、人類全体やその運命を表象する風景を見る時に浮上する可能性のようなものと言えるかもしれない。

マキアーネルのこの主張を「人類という普遍性」に観光を通してアプローチするものだと解釈するとして、本稿としては以下の二点を指摘しておきたい。

一つは、「場所」を断罪し普遍性を肯定するのみでは、事柄の複雑さを取り逃がすという点である。哲学者ドゥルーズ＝ガタリはかつてこう述べた。「新たな領土はしばしば人工で…アルカイックである。ただしそれは完全に現代に通用する機能を持つアルカイズムだ。…現代のファシズムを養うるとともに、革命的役割をも抽出しうる (少数民族…インディアン居留地)。」伝統

や慣習や人間関係などの様々なコードが無効化する現代社会において、様々な集団が己の記憶や物語の上に「新たな領土」を作ろうとするわけだが、その動きには危険性もあれば可能性もある。即ち、己のルーツや固有の場所を、誰が求めているか、いかなる機能をその場所が果たしているかという観点を忘れてはならない。特に少数派集団にとっては、「固有の場所」の探求が政治的に極めて重要であり、観光研究の文脈でも無視できない。十把一絡げに「固有の場所」への欲望を批判することは、意図せぬ抑圧的な政治効果を持ってしまうので、回避せねばならない。

逆にまた、例えばドバイに立つ高層ビルは、「人類による自然の制御や支配」という感覚を見る者に与え、この意味で「人類という普遍性」の感情を喚起するものかもしれないが、この意味での普遍性が、無批判的に肯定されるべきかどうかは、十分に議論の余地があるはずである。ここでも、「固有の場所」と普遍性との二項対立は捨てなければならぬ。

もう一つ、「人類という普遍性」に観光を通してアプローチする為には運動性と理念性の導入が必要だと指摘したい。この点については納富信留が参照する和辻哲郎の『風土』がヒントとなる。

和辻には「風土の弁証法的総合」という着想がある。一方で人は旅において異風土と出会い、一つの風土として生きてきた自分自身が浮上する経験を持つ（異風土としての自己了解）。これは我々が、旅先での些細な出来事に彼我の相違を見出す時、翻って自分の生きてきた風土の特殊性に気づくに至る経験に明らかであろう。他方で人は、旅において「可能性としての自己了解」を持つとされる。これは「異質なものの自体に自己を発見する段階」で、「様々な風土を重層的・並立的に内在させる形で人間存在の可能性を開示する」ような「私」が見出されるとも言われる（pp. 90-91）。具体的には、我々が旅先で異文化との差異を認めつつも、更にそれを超えて人類としての共通性を見出す経験や、自分自身がその土地に暮らすことを想像するような場合を想起すれば良いだろう。旅に伴うこの「異風土としての自己了解」と「可能性としての自己了解」の「弁証法的総合」という運動を生きることは、人類の一員としての己自身の自覚へと我々を導くものと言えるだろう。また、この過程において「人類という普遍性」は、弁証法的総合の「地平線の彼方」に、理念として想定されるものに留まる点にも注意したい。観光が「人類という普遍性」に接近する一つの道でありうるとすれば、その内実は、このような運動性と理念性の観点から、アプローチされることが可能だろう。

(2) 創造性と倫理性との繋がり

筆者の見るところ、マキアーネルの議論の二つ目の特徴として、創造性と倫理性が強く結び付けられる形で着想されている点が挙げられる。これまで見た通り、倫理性についてマキアーネルは、「旅行への欲望の生産的ポテンシャルを実現すること」、観光者を絡め取るツーリストバブルや「幻想」への懐疑の姿勢を持ちそれを「突き抜ける」ことと捉えている。勿論、全ての観光者が全ての機会にこの倫理を体現できるわけではないが、マキアーネルは、「観光者は語られ見られるもの全てについて、語られず見られていないものがあることを知っている」（p. 205）と述

べ、事が上手く運ぶ場合には、観光者の倫理性が観光者の創造性に繋がると主張するのである。

ここでマキアーネルが言う創造性は、多くの内実を含み、一義的には定義されえない。一つの方向性は、「観光により観光者の人生が完全に变化してしまう場合」(p. 44)、「実存の土台が変化する場合」(p. 11)である。例えば、レジスタンス運動家がナチスに殺された場所の銘板を見て観光者が熱心な反ファシズム者になる事例や、熱帯雨林を訪れた学生が全生命の繋がりを強く意識するに至る事例、ホワイトハウスを訪れた子供が大統領になることを強く決意する事例等が挙げられる。マキアーネル曰く、これらの変容は「完全に倫理的な領域」で生じ、「観光者とアトラクションの間で新たなアイデア、解決、夢が生じる」点が肯定される(pp. 44-45)。別の方向性としては、理想的観光者として、スタンダールが『ある旅行者の手記』(1838年)で描いたL氏という人物が言及される。多くの観光アトラクションがそうである「並外れたもの(extraordinary)」ではなく「予期せざるもの(unexpected)」を愛するL氏は、「全ての風景を構成する…不可視の主観性の層」を見ようとし、「世界のディテール」に関する語りを生み出す存在で、ラディカルな観光、「ツーリズムの核心におけるアンチ・ツーリズム」を擁護する者だと肯定される(pp. 206-209)。マキアーネル曰く、アリーの提出した「第一の眼差し」が「商業化された観光制度や実践によりインストールされる眼差し」であるのに対し、彼の求める観光倫理の体現者達は、「何か隠されていること」に自覚的で、「構造に窓を開ける対象や出来事」を探求する「第二の眼差し」を持つ者達である(pp. 209-210)。

以上のマキアーネルの創造性と倫理性に関する議論に関しては、「風景を見る倫理」と「主体の変化」と「観光者の創造活動(L氏の場合は「語り」)」の三つが明瞭に区分されていない為、彼が提唱したい理想的観光者の像が不鮮明になってしまっていると筆者は考えている。筆者は以前、マキアーネルによる「第一の眼差し」に対する「第二の眼差し」の提案を批判的にどう継承すべきか内在的に検討したことがあるが、本稿では、冒頭で述べたようにマキアーネルの議論とD&G哲学を突き合わせてみることで、両者の議論の展開可能性を実験的に模索してみたい。注意すべきは、D&G哲学の諸概念は完全に完成されたものではない点、また、各概念の構成要素が著作に応じ変動する為に概念の一義的定義が難しい点である。このような特徴を持つD&G哲学に関しては、その一つの達成点である『千のプラトーン』刊行から35年以上を経て、内在的かつ批判的研究が数多あるが、本稿の論脈でそれらに言及する余地は無い。以下、本稿ではD&G哲学の基礎概念のごく一部分を使用するが、その狙いは、D&G哲学の概念群を観光現象の文脈と接続しうる場面を見出すことで、今後その内実の更新を図る端緒とすることにある。以上の但し書きの上で、ツーリストサイトの議論から始めよう。

6. ドゥルーズ＝ガタリ (D&G) 哲学の導入に向けて

(1) 平滑空間と条里空間

我々が生活しているスーパーパノプティコン体制の社会と観光サイトに関する議論をまずは振り返ろう。二点が重要である。一つは、観光が現代資本主義の最前線を構成する現象である点である。これは SM・SC という形での狭義のものから、都市空間や田園風景を含む広義のものまで、観光に携わる人々（産業・自治体・住民）が世界中に観光バブルという観光サイトを生産し続けていることに顕著に表れている。もう一つは、スーパーパノプティコン体制においては、主体が自発的に体制の維持と発展に同調する点である。我々は SM・SC で買い物をする時、街歩きを楽しむ時、現在の資本主義社会の論理とその達成に対し、自発的かつ実践的に、賛成票を投じている。この状況下、我々はいかなる理論的道具を用い、観光サイトの批判的分析に取り組みれば良いだろうか。

ここで筆者は、D&G による資本主義の両義性の認識と、平滑空間 (l'espace lisse) と条里空間 (l'espace strié) との理念的区別の導入が有効だと考える。

資本主義に両義性を見る姿勢は先述のようにハーヴェイも持つものだが、彼の議論は D&G 哲学にその思想的源泉の一つを持つと推測される。D&G は、「資本主義は…その公理系を逃れる流れを全方向に発生させずにはいない」と述べ、「決定不可能命題 (propositions indécidables)」という着想を提出する。曰く、「我々が決定不可能命題と呼ぶものは…システムが接合するものと…諸々の逃走線に沿ってシステムから逃れ続けるものとの共存、分離不可能性である。決定不可能なものは優れて革命的決定の萌芽であり場である。」(pp. 590-591) D&G は資本主義が貧困・不平等・搾取・環境破壊等を産み出す故に悪であるというような、結果から批判する論法を取らず、あくまでも資本主義の運動の只中に潜在する解放の可能性を探ろうとする。これは 20 世紀の社会主義国家の顛末を見届けた我々にとって、説得力を持つ一つの立場であるだろう。

D&G の平滑空間と条里空間の区別も、資本主義社会に両義性を見るのと同様、「良い空間」と「悪い空間」を実体視するものではなく、理念的に設定される区別である。数学・物理学・音楽・技術など諸領域でのモデルを示しつつ構築される二つの空間概念の内実は複雑だが、D&G 哲学の主要用語で言えば、平滑空間は「出来事 (l'événement) や強度 (l'intensité)」が存在する「生成変化 (devenir) の空間」であり、条里空間は「測定可能な視覚的性質」が存在する「進歩の空間」である。現実には両空間は入り混じっているので、空間の分析は慎重に為されねばならない。平滑空間と条里空間の概念で具体的な観光サイトを分析する作業は別稿を期すが、本稿では特に、平滑空間を特徴づける「点に従属しない線」と「主体に属さない情動 (l'affect)」を示唆しておきたい。

D&G 曰く、条里空間では「線が点に従属する」が、平滑空間では「線は点に従属しない」。例えば SM・SC において我々は、気の向くままに施設内を散策し、「自由な線」を描けるように見える。しかし実は SM・SC の空間は、集客率の高いテナントを両端に置き中央にカフェを設

置するなど、様々な工学的計算やデータ分析に基づき設計されており、我々の描く「線」は「点」に従属するべく誘導されている。これは「平滑空間に見える条里空間」の事例と言えるが、逆のケースもありうる。「点と線」との関係性という観点からの、個別事例の考察が必要となる。

もう一つ、平滑空間の特徴である「情動」概念を導入し、「感情」概念と絡めて考察を深める作業課題が構想できる。D&Gによれば、感情は主体に帰属するが、情動は主体を変容させる。マキアーネルは、SM・SCを「エゴのナルシズムを満たす」快楽を主体に与える空間として批判し、他方で「痛ましい記憶」を論ずる箇所や「人類という普遍性」を語る箇所で、明言はしないが「崇高」に類する感情経験を肯定する姿勢を匂わせている。但しマキアーネルにおいて、観光経験がいかなる感情を主体に付与し、それが観光者の倫理性や創造性にいかなる効果を及ぼすかという問題は、明瞭に答えられてはいない。これを踏まえ、「感情と情動と主体の変化」の関係性という観点からの観光空間分析を構想すべきであろう。例えば、SMやSCでの「他者との協働文化創造」の経験をこの観点から考察することもできよう。

(2) 生成変化

次に、観光者という主体について、D&G哲学の導入を検討しよう。先述のように、マキアーネルの議論では、「風景を見る倫理」と「主体の変化」と「観光者の創造活動」の三つが明瞭に区分されていない為、理想的観光者の像が不鮮明である。加えて彼の議論では、理想的観光者が意志的であるか非意志的であるかについても、着想に揺らぎが見られる。

まず指摘したいのは、「風景を見る倫理」と観光者の創造性の議論とを分けて考える方が、事態が明瞭化するということである。マキアーネルの意に反するが、倫理的であることと創造的であることが完全に一致する必要は無い。先に示唆したように、「風景を見る倫理」については観光倫理教育の次元へと議論を接続する方が実り豊かであると筆者は考える。

次に、「主体の変化」と「観光者の創造活動」に関するマキアーネルの概念化の洗練の為には、近年の観光研究で活発化しているパフォーマンスの議論と、D&G哲学の「生成変化」概念の導入が有効である。『観光の眼差し』第3版でアーリ (& ラーセン) はパフォーマンス的転回 (performance turn) の契機を整理している。そこでは当然ながら、パフォーマンスは予め観光産業側により規定されており、実際の観光経験の現場でも様々な制御が働くが、他方でパフォーマンスが非安定性や偶然性に開かれてもおり、創造性や生産的实践、時には観光者による闘争や抵抗を可能とするものだという、パフォーマンスの持つ両義性の認識が確認されている (pp. 190-194)。パフォーマンスの議論は、観光空間という舞台を様々なアクターが演じることで観光という演劇が進行するという観点を採用する。これは観光者を役者に準えてその主体性を理解する、一つの有用な視点であろう。加えて注目したいのは、エデンサーがパフォーマンスを、「意図的であり非意図的・存在と生成に関わる・戦略的であり非反省的に身体化されている」と規定する点である。これは観光者の「闘争や抵抗」の二様態を示唆するものと解釈されうる。

一つ目の様態は、「意図的で、存在に関わり、戦略的な」パフォーマンスで、観光空間におけ

る「お約束」(写真撮影スポット・観光者として適切だとされる振る舞い等)を自覚的に破る場合である。ポスト・ツーリスト達の「抵抗的・即興的」なパフォーマンスにエデンサーは言及する(pp. 75-77)。

他方、D&Gの生成変化の議論は、エデンサーの言うもう一つの「非意図的で、非反省的な」パフォーマンスの様態に近い。或いはD&Gの議論はクラウチが言う、パフォーマンスティビティ(performativity)の着想に近い。パフォーマンスティビティは、「日常生活の行動が持つ、意図や能力により特徴づけられない偶然的ポテンシャル」とされ、「自己の深い再編成」とされる(p. 88)。クラウチがパフォーマンスティビティを「生成(becoming)」とも呼ぶことから我々は、大西洋を超え英語圏の観光研究に導入されたD&G哲学の響きを取り取ることができる。

観光者の形象化の為に、D&Gのこの生成変化概念から導入すべき重要な契機として筆者は、「記号(signe)との偶然の出会いから生成変化が始まる」という規定と、「微粒子(corpuscule)の関係から新たな多様体が生まれる」という規定の二つを挙げたい⁶⁾。

まず一つ目の、「記号との偶然の出会いから生成変化が始まる」という規定を導入するメリットはどこにあるだろうか。ポイントは「記号」の内実と「偶然の出会い」の二つにある。

ドゥルーズ哲学の基本着想として、何か価値ある事柄が始まる為には「再認(récognition)を逃れる差異(différence)」との出会いが必要である。例えば暫く振りに知人と会う際、その姿形の変化を見て時の流れに思いを巡らすことにもなるが、我々にその「思考を強いた」ものが正確には何であるか言い難いということがある。或いは人が或る異性に惹かれる時、正確にはその相手の何に惹かれているのか言い当て難いという経験を挙げても良い。いずれの場合でも、何か価値ある事柄(思考や恋)が主体に到来する為には、「再認を逃れる差異」との出会いが必要であり、ドゥルーズはこの差異を「記号」と称するのである。翻ってマキアーネルは、観光者の実存の土台の変化を語る際や、L氏が「予期せぬもの」を愛することを語る際、現象を列挙することしかできていない。即ち、創造が始まる端緒の事態を概念化できていない。それに対し我々はドゥルーズと共に、観光者の創造性が発揮される端緒には、「再認を逃れる差異=記号との出会い」があると、事態を概念化することができる。これが一つ目のメリットである。

この「記号との出会い」は、あくまでも「偶然」に委ねられている。マキアーネルにおいては、観光者の倫理性と創造性を過度に結びつける副作用として、観光者の意志性と非意志性に関する規定が曖昧化している。繰り返せば、「風景を見ることの倫理」に関しては観光者の意志の涵養が重要となるのであり、これは観光倫理教育の議論へと接続されるべき問題である。他方、創造性については、エデンサーの言う意図的かつ戦略的な即興パフォーマンスは観光者の意志の発動により生じうるだろうが、マキアーネルが観光者に期待する創造性(観光で人生が全く変わってしまうこと・世界のディテールの語りを産み出すこと等)の発生は、観光者が意志して始められるものではあるまい。D&Gの生成変化概念の導入により、創造性に対する偶然性の先行が明瞭に示されることとなる。これが二つ目のメリットである。

次に二つ目の、「微粒子の関係から新たな多様体が生まれる」という規定を導入するメリット

は何か。D&G 哲学において、「生成変化という出来事には主体が存在しない」。しかし、我々はいくらにも「主体」を軸にした世界観に慣れ過ぎている。故に「主体無き出来事」を理解し表現することが困難になっている。例えば、パフォーマンス性はクラウチにより、「自己の深い再編成」という形で「自己」を軸に表現される。マキアーネルも、「反ファシストになった主体」や「環境保護に目覚めた主体」、「大統領になることを決意した主体」を語るに留まり、その主体の誕生を徴づけた「生成変化」という「出来事」そのものを語る語彙を持ってはいないのである。

それに対し D&G は、何か創造的な事柄が生じている「出来事」の位相を捉える語彙を開発しようとしたと言える。例えば彼らは、蟹のような歩き方を映画で披露した俳優の演技についてこう言う。「我々にとって本質的なのは次のことだ。つまり人間が動物に生成変化するのは、何らかの手段と要素を用い、動物の微粒子との運動と静止の関係に入る微粒子を放出する場合のみということだ。人は分子としてしか、動物に生成変化しない。」(pp. 336-337)

以上の語彙を用いれば、観光者がツアーリストサイトで生成変化を生きる時、そこに主体は存在せず、「微粒子の関係」という「出来事」のみがある。マキアーネルのように観光者の創造性を称揚することは、必要な作業かもしれないが、概念的には十分ではない。我々はこの D&G 哲学の語彙を活用し、様々なツアーリストサイトで、何と何の微粒子が関係し、いかなる多様体が誕生し、それが誰にとっていかなる機能を果たすものなのかを、個別事例において考察していく必要がある。即ち、「生成変化という創造」の「解剖学」を展開せねばならないのである。

7. 哲学的次元に関する総括

本稿では、観光倫理を提唱するマキアーネルの議論を、観光の置かれている社会状況・ツアーリストサイト・観光者という主題に分けて批判的に分析してきた。前節では、D&G 哲学の概念の導入によるマキアーネルの議論の更新作業の方向性を模索した。最後に本節では、マキアーネルの議論の哲学的次元での総括を行い、本稿を締め括りたい。

勿論、ここで但し書きを付けておけば、マキアーネル、アーリ、フーコー、ラカン、D&G といった全ての論者の言説の関係性を巡る完全かつ包括的な総括は、詳細かつ厳密な検討を要するものであり、本稿の手に余る。例えば「マキアーネルとフーコー」、或いは「D&G とフーコー」との関係性といった個別主題は、それぞれ独立した巨大な問題である。よって、本稿で以下に提出できるのは、マキアーネル自身も意識していないかもしれない哲学的次元での彼の言説の位置付けに関する一つの「見立て」に近い。

第5節(2)で触れたように、マキアーネル曰く、観光倫理を体現する観光者である為には、「何か隠されていること」に自覚的で、「構造に窓を開ける対象や出来事」を探求する「第二の眼差し」を持つことが肝要である。彼はアーリが提出した「第一の眼差し」を観光者に関する一貫した説明だと評価しつつも、それが「商業化された観光制度や実践によりインストールされる

眼差し」である故に不十分だと見做し、第二の眼差しを提唱する。その際、アーリがフーコー哲学に依拠するのに対し、マキアーネルはラカンの精神分析に依拠する。

この「第二の眼差し論」は以前に拙稿で検討したので詳論しないが⁷⁾、哲学的次元での総括として、欲望を主体に帰属させる着想をマキアーネルが維持する故に、二つの眼差しの相違が不明瞭化している点と、寧ろマキアーネルが肯定したい観光者の倫理性・創造性を概念的次元で基礎づけるには、実は彼が暗黙に前提するフーコー的社会像を離れ、D&Gの社会像を採用する方が適切である点を指摘したい。

マキアーネルは、アーリの第一の眼差しを持つ観光者が、「見るように仕掛けられたもの」を別様に見る抵抗の可能性を持つことを認めつつも、それは「我々をより深い決定論に導く」(p. 197)と批判する。「観光者向けの表層の場所を逃れる、人跡未踏の地に行く、舞台裏にまわる」(p. 201)などの観光者の欲望も、観光者の抵抗の表現だが、マキアーネルによれば、第一の眼差しがこれらの欲望まで包摂できる。その上で彼は、観光者のこのような欲望や抵抗は、「今見えていないものは、覆いを取ればやがて見えるものである」と考える「可視的なものの論理」の内にあり、その論理に従う限り、観光者は自由ではないと言う(pp. 201-202)。これに対しマキアーネル自身は、「(第一の)観光の眼差しを突き抜けて見る、過去を見る、超えて見る」(p. 207)ことを欲望する観光者像を、ラカン理論による存在論的基礎づけを試みつつ提出するのである。

このマキアーネルの議論については、彼が挙げる、観光により実存の土台が変化する事例や、観光者が創造性を発揮する事例(L氏による「語り」等)を想起すれば、第一の眼差しの議論では捉えきれない運動が、観光者とアトラクションの出会いから発生する事実は認めうるだろう。但し、その運動を発生させる欲望を観光者という主体に帰属させる必要は無いのではないだろうか。マキアーネル自身は、第二の眼差しを提起する根拠として、観光者が持つ「観光者的な表象を越えようとする欲望」や「過度に観光的でない場所に行きたいと表現される欲望」を挙げているが(p. 205)、これらの欲望は第一の眼差しの主体が持つ欲望と見まがうばかりで、寧ろこの言明により、二つの眼差しの相違が不明瞭化してしまう。

繰り返しとなるが筆者としては、マキアーネルの議論に伏在する倫理性と創造性との過度の繋がりを緩和し、倫理性(風景を見る倫理)の議論は教育の文脈に接続し、創造性の議論はD&G哲学の存在論や概念装置へと接続する方が、展望が拓けると考えている。D&G哲学への接続は前節で試論的に述べたので、最後にマキアーネルの議論の哲学的基盤をD&G哲学に移すことの意味を述べておきたい。

まず、マキアーネルの言説には、一見したところフーコーへの両義的立場が見られる。即ち、社会状況認識に関しては「パノプティコンの全面化」を言うことでフーコーを継承しつつ、眼差し論に関してはフーコー=アーリを批判し、ラカンに依拠する。しかしより深い社会存在論の次元では、やはりフーコーに依拠しているとも言えるのである。この点は、ドゥルーズがフーコーと己の社会像の根本的相違を述べる箇所を参照すると、明瞭化する。

ドゥルーズがフーコーに宛てた 1977 年の手紙によれば、D&G の社会存在論で最も根底的な現象は、フーコーが言う「正常化し規律を与える」権力装置ではなく、「欲望 (désir) のアジャンスマン (多様体・組み合わせ)」と諸々の「逃走線 (les lignes de fuite)」である。「第一にあるのは、社会野が逃れていくこと、至るところでまず逃れていくこと、諸々の逃走線が第一にあることだ…諸々の逃走線とは、欲望のアジャンスマンの先端だ」(p. 116) とドゥルーズは言う。そして、「ミシェルには、歴史的集団の決定因としての諸々の逃走線や脱領土化の運動に当たるものは無いようだ。僕には、諸々の抵抗現象の地位に関する問題は無い」(p. 118) と両者の違いを表現する。

権力装置を根底に置くか、欲望の多様体を根底に置くかという観点からマキアーネルの立論を見ると、彼もまたフーコー同様に、権力装置を根底に置く社会観を採用していると言えるだろう。それ故、いかにして観光者がツーリストバブルや「幻想」から抜け出るかという問いを立てることになるのである。これに対し、本稿では、マキアーネルの議論を D&G 哲学の社会観と概念装置へと転調・接続することを試みた。D&G によれば、ツーリストサイトを含む社会野は、至るところで「水漏れ」を起こしており、権力装置からの脱却の可能性を存在論的に基礎づける必要は無い。即ち、マキアーネルのように第二の眼差しを精神分析で基礎づける必要性は無い。寧ろ今後我々に必要な作業は、観光者と「差異としての記号」との偶然の出会いの様相や、観光空間における「生成変化」の有様を、個別事例に即して考察していくことなのである。

以上の総括の狙いは、マキアーネルの言説がフーコー哲学のみならず D&G 哲学にも接続しうる可能性を持ち、それぞれの方向に展開可能な作業や課題があることを示唆することにある。この総括により、マキアーネルの理論的ポジションが揺さぶられ、哲学的には我々は、D&G とフーコーの社会像の妥当性や関係性の問題を再考する必要性にも思い至ることとなる。D&G の表現で言えば、我々は「フーコーか D&G か」ではなく、「フーコーも D&G も」継承する必要があるはずであり、本稿は、マキアーネルの言説が両者に関わりうる複雑さを持つ点を示してきた。換言すれば我々観光研究者は今後、マキアーネルの言説を携えつつ、観光現象における「権力装置」(第一の眼差し) にも、「欲望の多様体」にも注目し、分析を試みる必要があるということである。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費・課題番号 15K16600 の助成を受けたものです。

注

- 1) 現代の観光が置かれている状況に関しては、須藤廣の卓越した論考がある。須藤 (2008) : 『観光化する社会—観光社会学の理論と応用』(ナカニシヤ出版), 特に第1章を参照のこと。
- 2) “tourist bubble” については、観光者を取り囲む「泡」や「ドーム・円蓋」という訳語も考えられるが、本稿では原語をそのまま読み下す。
- 3) ハーヴェイは、『反乱する都市』において、「何らかの直接的ないし間接的に取引可能な対象がいくつかの決定的な点で独特で再生産不可能なものであって、それを排他的に支配する権力のおかげで、社会的行為主体が長期間にわたってより大きな収入の流れを引き寄せることができる場合」(p. 158) に「独占レント」が生じると言う。
- 4) アーリは『観光のまなざし』第6章で、奴隷貿易に関わる場所を巡るものなど、幾つかの「オルタナティブな遺産ツアー」に言及している (p. 148)。
- 5) “communion” は霊的交渉、聖体拝領、信仰の共有等の意味で、この言葉を使用する含意の詮索は興味深いですが、ここでは原語をそのまま読み下す。
- 6) 「生成変化」という概念はドゥルーズ哲学の要であり、その内実は多岐にわたる。本稿では主に『千のプラトーン』と『差異と反復』、プルースト論を念頭に置く。
- 7) 拙稿「マキャーネルの『観光の倫理』における〈第二の観光の眼差し〉の内実と意義について」(第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集, pp. 269-272, 2014年), 及び「(研究ノート) D. MacCannell 著 “The Ethics of Sightseeing” の批判的継承に向けて」(神戸夙川学院大学観光文化学部紀要第5号, pp. 88-98, 2014年)を参照されたい。

引用・参考文献

- Urry, John & Larsen, Jonas. *The Tourist Gaze 3.0*, London, SAGE publications, 2011
- MacCannell, Dean. *The Ethics of Sightseeing*, University of California Press, 2011
- Rickly-Boyd, Jillian M. et.al. *Tourism, Performance, and Place: A Geographic Perspective*, Ashgate Pub Co, 2014, pp. 1-2
- Deleuze, Gilles. *Pourparlers*, Les Éditions de Minuit, 1990, pp. 240-247
- Lazzarato, Maurizio. *The Concepts of Life and the Living in the Societies of Control, in Deleuze and the Social*, Edinburgh University Press, 2006, pp. 171-190
- Z. バウマン著 澤田真治・中井愛子訳『グローバルイゼーション 人間への影響』法政大学出版局 2010. pp. 70-71.
- 橋爪紳也『ツーリズムの都市デザイン：非日常と日常の仕掛け』鹿島出版会 2015. pp. 6-8.
- 南後由和「建築空間／情報空間としてのショッピングモール」(若林幹夫編『モール化する都市と社会』NTT出版 2013. pp. 119-190)
- 東浩紀+大山顕『ゲンロン叢書001 ショッピングモールから考える ユートピア・バックヤード・未来都市』株式会社ゲンロン(電子書籍)2015.
- 須藤廣『ツーリズムとポストモダン社会 後期近代における観光の両義性』明石書店 2012. p. 161.
- D. ハーヴェイ著 森田成也他訳『反乱する都市 資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』作品社 2013.
- 円堂都司昭『ディズニーの隣の風景 オンステージ化する日本』原書房 2013. pp. 155-187.
- D. アトキンソン『新・観光立国論』東洋経済新聞社 2015. pp. 214-224.
- Deleuze, G. & Guattari, F. *L'anti-Œdipe*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1972, pp. 306-307.
- 納富信留「哲学的風景論の可能性」(安彦一恵&佐藤康邦編『風景の哲学』ナカニシヤ出版 2002.

pp. 81-101)

Deleuze, G. & Guattari, F. *Mille Plateaux*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1980, pp. 531-556.

Edensor, T. *Performing tourism, staging tourism (Re) producing tourist space and practice*, in *Tourist Studies*, 1 (1), 2001, pp. 59-81.

Crouch, D. *Tourist Practices and Performances*, in *A Companion to Tourism*, Wiley-Blackwell, 2004, pp. 85-95.

Deleuze, G. *Deux régimes de fous*, Paris, Les Éditions de Minuit, 2003, pp. 116-118.